

犬
になつた
女王さま
Ⅲ
MAJING
PRINCESS
-2-



成年
コミック

犬いぬになつた 女王おうじよさま



ほうけんのしょ

さいしょからはじめる

▶ つづきからはじめる

▶ いぬになつたおうじよさま I

「んっ……
はあっ……はあっ……」

『ごきげんようお姉様
フフ…素敵な格好…
まるで牝犬みたい♡』

「そんな…これはあなたが…」
『あら？そんな事
おっしゃるなんて悲しいですわ
私はお姉様が素直になる
お手伝いをしているだけ
それに…ユツチはこんなに
素直になったのにな』」

アッ

「んあっ♡」
『ウフフ…これくらい素直になって頂ければ
国民を人質に取ったりなんてしませんのに…
まあ、国民はおろか**国王**ですら
お姉様と私が入れ替わったことに
気付いていませんが♡』

「そん、な…あはあっ♡」
『お忘れになったのかしら？
私はお姉様から生まれた、もう一人のムーンプルクの王女…
お姉様は王女でありながら、淫らな欲望を
「やめてっ!!!」』

『ふふ、まあ良いですわ…
もうすぐ素直な牝犬になるのですから
存分に楽しみましょう♡』

アッ

『さあ…お姉様♥』

『美味しい餌を差し上げますわ
どうぞ、召し上がりください♥』

「うっ……これは……？」
『ああ、先ほどお城の皆様のお相手をして差し上げましたの
その時に頂いた精液ですわ♥』
「精液……？」

「ええ♥皆様随分と王女様に淫らな想いを抱いておいででしたので私が替わりに慰めてさしあげましたの♥」

「そんな…嘘」
「あら？嘘だなんて心外ですわ、皆様、大好きな王女様を犯せてお喜びでしたわ♥」

「それに、ホラ…
お姉様がお飲みになった精液にはお父様お父様に射精していただいたのも混じってるんですよ♥」

「あ、ああ…お父様あ…」



『フフ…可愛そうなお姉様…
信じ守ろうとしていた国民に欲望の対象として見られ
さらに、尊敬していた国王お父様にまで…』
『うっ…うう……そんな…
うああ…嫌あ……』

『お分かりになったでしょう？
人間は皆、淫らで背徳的な欲望を持っているもの
お姉様が自らの欲望を否定しなくてもよいのですわ
だから、もっと素直になりましょう？』

『なんで…こんな…』
『あら、言ったでしょう？
私はもう一人のムーンプルクの王女
だから、私の願いはお姉様の願い
お姉様が自らの欲望に素直になれるように
お手伝いして差し上げるのが私の役目…』

『さあ、素直になりなさい…
使命も何もかも全部忘れて、
欲望の…牝の本能の赴くままに…』
『あ、ああ……』

『きもちよくなりましょう…』

「んっ…んんっ♡
じゅるううっ」

「ふふ…お上手ですわお姉様♡
いかがですか？精液のお味は？」

グビュ

「それでは素直になれた
お姉様に…んっ♡」

「んくっ、はあっ♡んっ 美味しいです♡
すごく生臭くて、飲み込むと喉に引っかけかかって
喉を精子に犯されてるみたい♡」
「フフ、随分と素直になられて♡
欲望に身を任せるのは素晴らしいでしょう？」
「ああっ♡はいい素敵っ♡
素直になるの気持ちいい♡」

グビュ

「♡褒美を差し上げますわ♡
今度は私のをたっぷり味わってくださいいな♡」

「ああ…おちんちん♡…ごくっ」

『あらあら、待てと言っても聞きそうにありませんわね
しょうがない牝犬だこと♡』

「ごめんなさい…でも…もう…」

『ええ、ご褒美ですもの…どうぞ召し上がれ♡』

「はいっ♡
じゅるうっ」

じゅる

「んぶっ…じゅるっじゅるるるう」

んうっ♡んちゅっ…ぶはあっ♡

ずちゅううううううううっ♡

ちゅううううううううううう

「くうっ♡すっ♡いがつつきよう♡」

んっ、私もう限界のようですわ…」

「ぶあいつ♡くらきらっ♡

のろのおくにせーしっ♡

びゅーってらしてくらきらっ♡」

「くっ!!」

びゅううううううううう!!



「ふん♡ふん♡ふん♡ふん♡」

ふん
ふん
ふん

ふん

ふん

ふん

ふん

「あらあら、喉の奥に射精されてお漏らし？
はしたない牝犬ですこと♡」
「ふはっ！はあっ♡んっ♡んくっ
あはあ♡こめんなき♡」



「やつと素直になったと思えば…
だらしない牝穴にはお仕置きが
必要のようですわね♡」
「ああ…はいつ♡」

「わ、私は…オチンポと
精液が大好きな淫乱な王女
いえ…牝犬ですう♡」

「お口に射精されただけでお漏らししてしまう
しまりのない牝穴をオチンポで塞いでっ
お仕置きしてください♡」

おま

『ふふ、よく出来ました♡』

プチプチプチッ

「あぐっ！」

『あら？そーういえば初めてでしたわね♡
あまりに淫乱なので忘れてましたわ♡』

ズチユックグプッ

「あっ！ごめん…さいいつ！
ひぐっ！いんらんっ処女でっ！
んへああっ！？」

「んあっ! あっ? ああんっ♡」
「ふふっ♡ 気持ちよさそうなきき声出して
どうしたのかしら?」

「ひぐう♡ おちんぽお♡
お、オマンコ、の奥に当たると
あっ♡ 頭がじびれて
ああんっ♡ イタイのに
キモチイイのおおっ♡」

ぽん

ぽん

「まったく、お仕置きですのに
痛いのが気持ちイイなんて…♡
ふふ…でしたらもっと痛くして
差し上げますわ♡」

「あっ? やあっ…」
「ご心配なく…でもその前に♪」

お

「え…? ホイ…ミ?」

「ええ♥破瓜の傷を治してさしあげましたの♥
もちろん処女膜も元通りに…そして
また奪ってさしあげますわっ!!」

「ひぐううううっ!!」
ずちゅっグププッ

「あはははっ♥いかがですお姉様?
処女を失い続ける痛みはっ!!」

ミチミチイッ
「あぎっ!!ふうっ…んっ♥
ああああああっ♥」

「あはっ♥素敵ですわお姉様っ♥
処女膜破られて感じるなんてっ!!」

プシヤアアアアアア
「はひいっ♥さっきまれ処女らったのにい♥
処女膜破られてキモチイんいれすうっ♥」
「うふふっ♥これならどんなモノでも
受け入れられそうね♥」

『いいですわ♥
そろそろ止めを刺してあげます♥
イキ狂いながら孕みなさいっ!』
『はひっ♡はらみませすっ♡
しよじよまんこになかだしされて
にんしんしますっ♡』

『あはあああああっ♡』

あ



「フフ：素敵な格好：本当に牝犬ね♡
そんなお姉様にお願いがあ
聞いてくださるかしら？」
「おねがいの？」
「ええ、お姉様には繁殖用の牝犬に
なっていたらいいの♡」

「はんしょく？」
「そうですね、いろんな人が
お姉様を孕ませてくださるの：
たくさん交尾してたくさん妊娠する：
素敵でしょう？」
「ああ：こうび♡」

「だから、王女のお仕事は私に任せて
お姉様は立派な牝犬になってほしいの
お願いできるかしら：お姉様♡」

「はい♡
おうじょうまめ♡」

『はい……ムーンブルクは落ちましたわ……
いえ、今はムーンペタに……はい……
可愛がってもらっているようです……
ええ……優秀な子を産んでもらいますわ……
ロトの血を受け継いだ魔物を……ね……』



あとがき

「犬になった王女さま 2」をお買い上げ
頂きありがとうございます。

2010年頭くらいにPNを“sin”から“真(シン)”
に改めました真です。

読みは変わらないので、今まで通りシンと呼んで
頂ければ幸いです。

で、ようやく出すことが出来ました！

スケジュールミスで漫画は断念したのですが、何
とか形に出来てほっとしています。

結局見せゴマばかりの構成なので、漫画とそう
変わらない作業量だったりして・・・

今回は話の作り方を変えてみて、やっと自分に合
った作業の仕方が分かってきた感じなので、次は
もう少しマシな本が出来ていると思います・・・
いや、思いたいなあ・・・がんばります。

さて、次回作のお話ですが、まったく考えてませ
ん、今期のだと「オオカミさんと〜」の乙姫さんが
結構お気に入りですが、またドラクエの何かをや
るかもです、意表をついて魔法少女モノとかムニ
ヤムニヤww

とまあ、こんな適当な感じですが、次回もお付き
合いいただければありがたいです。

それでは、いつかどこかで！

2010/08/05 真

おくづけ

著 者 真

発 行 sin-maniax

<http://sin-maniax.com>

sin@sin-maniax.sakura.ne.jp

誌 名 犬になった王女さま II

発行日 2010年8月15日(初版)

印 刷 (株)日光企画

＊ 「未成年者の購入購読及び

各種媒体への無断転載禁止させて

いただきます 予めご了承ください。



MANIA